

# 巻 頭 言

粟屋 剛（岡山大学）

本誌「北海道生命倫理研究」は第3号まで回を重ねてきた。今回（第4回）は、高齢者医療・地域医療特集号が企画されている。北海道生命倫理研究会ではこれまで高齢化社会における医療・福祉の問題を中心的課題としてとり上げてきたが、この機会に集約した形で発表しようとしたものである。本研究会は北海道の地で立ち上げられたという性格上、この地の地域医療のさまざまな問題に対応していくという使命があると考えてきたが、今回の特集はこのことを反映している。

「北海道生命倫理研究」は北海道生命倫理研究会の活動の成果として編集されている。研究会は夏季セミナーと冬季セミナーという形で毎年2回、これまで7回の会を重ねてきた。第6回と第7回のセミナーでは、イギリスにおけるリハビリテーションと介護の問題、独居高齢者問題、地域医療と医療の公平性の問題、終末期医療とスピリチュアリティの問題、介護制度改正の問題、腎移植と腎提供の問題について発表がなされ、活発な議論をともにする機会をもつことができた。ところで昨今、生殖医療の問題、人体資源化・商品化の問題、疾病の治療を超えて医療技術を利用するエンハンスメントの問題なども大きな関心を集めている。さらには、研究不正の問題に関しても大きく取り沙汰されている。研究会は、そうした問題についても今後、検討する機会をもつことを目指している。

高齢化は、自立度が徐々に低下し依存度が徐々に高まり、最後には死に至る長期にわたるプロセスである。ここでは、これまで生命倫理・医療倫理の分野で議論されてきた、時間的に限定される安楽死、延命治療の不開始・停止などの問題と並んで、終末期に至るまでの長い期間にわたる高齢期のあり方を問う新たな問題が投げかけられていると思われる。

本特集号はそれぞれ、公衆衛生学、地域・老年看護学、東洋思想を専門分野とする執筆者から、高齢者医療・地域医療における問題の抽出とそのあるべき方向性の提示がなされている。まず、公衆衛生学の立場から、北海道のひとつの地域における、独居高齢者と同居高齢者の健康関連要因が示される。次に、地域・老年看護学の立場から、せん妄や認知症の症状を呈する患者に対する、看護職の組織としてのあり方の検討がなされる。さらには、東洋思想研究の立場から、西洋思想との比較における、東洋における死に対する態度及び生と死の位置づけの問題が論じられる。

また、本特集号は海外での動向にも目配りすることを目論んでいる。シカゴにおける“Aging in America Conference 2015”参加についての報告。そして、以下の①～③の三点についての翻訳と解説。①ビーレフェルト大学公衆衛生学講座 Mobarak Khan 講師への「バングラデシュの独居高齢者」についてのインタビュー調査、②Kerstin Hämel 教授への「ドイツの独居高齢者」についてのインタビュー調査、③トリーア大学心理学講座の Sigrun-Heide Filipp 教授への「ドイツの独居高齢者」についてのインタビュー調査。

本誌を受け取った研究者には、研究会のさらなる発展のために、忌憚のないご意見をいただければ、また、北海道での生命倫理研究に関心を向けていただければ幸いである。

2015年10月吉日